

衣服と建築

1960年代に展開した建築運動とその代表的作品の分析を通じて

Clothes and architecture

An analysis of architectural movement and its masterpiece developed in 1960 's

○杉山 弘樹¹ 田所 辰之助²○Hiroki Sugiyama¹ Shinnosuke Tadokoro²

This research shows the analysis of clothes and architectures. It is revealed that there is a common feature of these two essence. Miyake Issei invented innovated ways for cloth making such as various clothes consisting of a single whole piece. It is reflected on architectures that new potential of clothes and the connection with clothes. Then it will be mentioned the analysis of thoughts based on ideas of architects having critical thoughts for society in 1960s. The result of this research includes several facts above.

1. はじめに

現代建築のあり方を考える上で衣服との関連に焦点を当て、衣服と建築の成り立ちの相同性について研究する。衣服と建築には身体を覆うという共通項が認められる。また両者は、人間の身体を保護する機能を共有している。両者は様々な点で類似しているのではないだろうか。衣服と建築、両者が持つ共通項である、身体と世界の中に存在し、身体を強制するのではなく解放する役割を持つ衣服のイメージを起点に、情報源を備えながらも市民に解放されていく建築空間の新たな形成手法について考察していく。

2. 研究方法

衣服のアナロジーとして、自由な曲線を用いた有機的な建築の考え方が想定できる。1960年代に活躍したアーキグラムをはじめとする、社会批判を行ってきた建築家に着目する。磯崎新は『建築の解体』で1960年代を代表する建築家について取り上げている。社会批判を行ってきた建築家たちによる有機的な形態を持つ建築作品を検証し、衣服と建築の関係性に対する分析に反映させていく。また、三宅一生が創り出してきた衣服の分析を行い、身体との新たな関係性について触れたい。

3. 衣服と建築の持つ類似点

衣服と建築には類似点が存在しており、両者は同じように捉えることが可能であると考えられる。まず、衣服と建築の形の類似である。また両者は、「身体を覆う」「人間の身体を外部環境から守る機能」

という類似点がある。そして「社会的、そして個人的さらには文化的なアイデンティティの表現としての役割」も果たしてきた。更に、両者の創造的プロセスにおいては平面を用いることから始まり、複雑な立体形態を生み出す類似点。衣服と建築はこのように様々な類似点があるが、「身体と世界の中に存在するもの。身体を強制するのではなく、解放して様々な行為を誘発すること」⁽¹⁾という類似点は今回の研究で最も重要視される。また、三宅一生は身体と衣服のより良好な関係性を求め革新的な服作りに挑んでいるデザイナーである。身体を最も解放して様々な行為を誘発する衣服に最も適していると私は考える。一枚の布で身体との関係性や「ゆとり」「間」を最も追求し、衣服と身体との新しい関係性を試みており、ものづくりの在り方のさらなる可能性を見出す活動をしている。それらは衣服と建築の分析に反映できると考える。

4. 社会批判を行ってきた建築家

衣服と建築の関係性を分析するにあたって、衣服の延長線上の建築、幾何学的造形を建築に反映させていたものが1960年代に出現する。アーキグラムをはじめとし、SUPERSTUDIO, Haus rucker co, ハンス・ホラインなどの社会批判をし、新たな思想を提案をしていく建築家がいた。実現可能な建築物を設計することよりも、彼らの持つ批判を要素に想像力を操り、都市や住空間に対する斬新なイメージを提示することに意義が置かれており、まさにそのこと全てが建築であるという、社会批判を建築運動で行ってきた。それらは身体の形状や自然から着想

1:日大理工・学部・建築 2:日大理工・教員・建築

を得て、有機的形態の創造を目指していた。その建築物の周辺環境を全て吸収し、存在のあり方、人間の存在そのものが建築ではないかと言っているように読み取れる。これらの建築家たちの思想を検証していくことで、衣服と建築の分析の主軸になるのではないかと考える。

4-1. アーキグラムについて

「プラグインシティ」(1962)は、当時の社会情勢である消耗品化を対象にし、建築の観点から見直さなければいけないと定義したものである。消耗品化傾向を建築に流入するのを阻止したのは建築家である。しかし建物には消耗品化の対象となりうる部品がある。それを隠してきた近代建築への不満と、モダニズムを批判対象とし、既存の建築の殻を破ることに狙いがあった。「リビングポッド」(1967)「クッシクル」(1967)「スータルーン」(1968)は住環境をそのまま持ち歩くことを可能にする道具であると共に、最初の短期型居住パッドとされてきた提案である。これらは土地を前提とするという、建築特有の制限から解放されることを目的とする。伝統的な建築の考え方が持つ、建築の要素のヒエラルキーからの解放にあるとされている。アーキグラムが最も伝えたかったことは、空間や状況にとって大事なことは場のデザインではなく、そこで環境がどう変化し、どんな活動が繰り広げられるかが重要視された。(2)

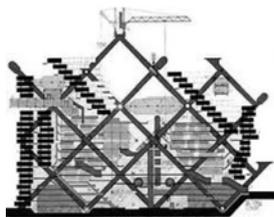


fig1.Plug in city



fig2.Living pod

4-2. Haus rucker co について

「マインドエクスパンダー」(1967)は直訳の通り精神を拡張するものとされており、真の「いわゆる内的世界を認識する道具」(3)としている。その他にも様々な活動を行ってきたが、これらの活動は認識というものの焦点に置き、刺激し、自由にし、解放し、それにより他の次元への変換を可能とし、あらゆる形状、あらゆる提案が建築であるかのように活動を行っていた。

4-3. SUPER STUDIO について

「コンティニューアンスモニュメント」(1969)は、モダニズムと同様に、歴史的な文化を消去しようとしたプロジェクトである。このプロジェクトからも分かるように、superstudio は、既存のオブジェクト、都市、オフィス空間の持つ本質的な矛盾を指摘し、徹底的に否定しつくす行為の一部と建築を考えていた。



fig3.Mind expander



fig4.Continuous Monument

5. まとめ

社会批判を行ってきた建築家たちは当時の既存の殻を破る、制限からの解放を目的とし有機的な建築を提案してきたと言える。それらを踏まえ現代建築や都市に対する批判的な提案として、現代における有機的な建築のあり方を考究し、現代社会の様々な制約からの解放を目指す建築の計画、設計を試みていきたい。

6. 参考文献及び引用文献・図版出展

参考文献

- [1] アーキグラム「アーキグラム」 鹿島出版会 1999年
- [2] 森美術館「アーキラボ」 平凡社 2004年
- [3] 三宅一生「MIYAKE ISSEY 展 三宅一生の仕事」株式会社求龍堂 2016年
- [4] 磯崎新「建築の解体」 美術出版社 1975年
- [5] Peter Lang/William Menking 「SUPERSTUDIO」 2003年

引用文献

- (1)『GA JAPAN 137』 A.D.A.EDITA Tokyo.2014年
- (2)アーキグラム「アーキグラム」 鹿島出版会 1999年 p.16
- (3)森美術館「アーキラボ」 平凡社 2004年 p.76

図版出展

- fig.1 <http://www.arttowermito.or.jp/archigram/archij.html>
 fig.2 <http://db.10plus1.jp/backnumber/article/articleid/661/>
 fig.3 <http://anthropomorphe.blogspot.jp/2009/05/second-nature.html>
 fig.4 http://aath.at.webry.info/201001/article_4.html